

攻ずる敦賀は、渡瀬嘉朗の良き薫陶を受けて、同じく機能主義統辞論の緻密な研究にいそしむ一方、フランス語教育や学内運営にも、その独自の見解をもって、覇気あふれる取り組みを示している。松浦は、十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのフランス近代絵画の形式的ならびに批評的な次元での分析を通して、近代芸術の歴史・理論の研究に励んでいる。また、水林は、ジャン・ジャック・ルソーを中心とした啓蒙主義時代のフランス文学の社会的な研究を精力的に続けると同時に、その卓越したフランス語の能力をもってフランス語教育にあたっている。

なお、フランス語学科では、日本人教官のほかに一人のフランス人教官——一九七九（昭和五十四）年以後は二人の教官——が、外国人客員教官として、授業の運営の面で大きな貢献を果たした。一九六六—一九九二年の間の外国人教官は約二〇名にのぼる。なかでも、アラン・ヴァルテールは、後にボルドー第三大学の比較文学講座教授となり、『古典的な日本のエロティックなもの』（ガリマール社、一九九四年）を刊行した。また、演劇の専門家であるミッシェル・ヴァッセルマンは、関西日仏会館の館長を務め、日本思想史の専門家のエリック・セズレーはフランス国立科学研究センターの研究者として活躍し、その業績により「渋沢クロード賞」を受賞した。さらに、ダニエル・ストリューヴは、プレイヤード版の仏訳井原西鶴全集の翻訳に参加している。

3 改変期 一九九二年以降

大学院地域文化研究科博士課程の設置

一九九〇年代に入ってから、本学は改変期を迎える。改変はまず大学院を対象に行われた。一九九二（平成四）年、かねてより実現を望む声の高かった大学院博士課程の設置が成る。従来の修士課程のみの外国語学研究科と地域研究研

究科を統合・発展させるかたちで、地域文化研究科博士課程が充足することとなった。この博士課程は、前期二年の博士前期課程（修士課程に相当）と後期三年の博士後期課程に区分される。博士前期課程には研究対象地域ごとの七専攻が置かれ、博士後期課程は地域文化専攻の一専攻のみとされた。博士前期課程はさらに、各専攻ごとに、言語文化、地域研究、国際交流専修の三コースが置かれ、学生は、専攻とともに、これらいずれかのコースを選択して博士前期課程に入学することになる。

フランス語科の教官は、博士前期課程に関しては、全員が担当授業を持ち、博士後期課程に関しては、当初は、渡瀬、二宮、西永、敦賀、水林の五人が、そして、渡瀬、二宮の退官（後述）後は、ほかの三人が担当授業を持って現在にいたっている。

一九九八（平成十）年三月現在までのところ、本学では、八人が課程博士、一人が論文博士として学位を授与されている。本学でフランス関係の研究に携わる院生からは、まだ一人の博士も誕生していないが、九八年三月現在、フランス語学を研究テーマとする学生が四人、フランス文学・哲学をテーマとする学生一人が博士後期課程に在籍しており、遠からずして彼らのなかから本学での博士号取得者が生まれるであろう。いずれにしても、博士後期課程が専門的な研究者の養成の場たらしとする以上、その発展には博士号取得者の増加がますます重要な条件となってくることは必定である。院生にも、教官にも、そのためにさらなる努力が必要となろう。

一九九四（平成六）年から九五年にかけて、長年フランス語学科で教壇に立ち続けてきた三人の教官が退官を迎えた。九四年三月には、フランス文学の岩崎力が、九五年三月には、フランス言語学の渡瀬嘉朗、フランス歴史学の二宮宏之が、相次いで本学を去った。渡瀬の後任には、本学大学院外国語学研究科ロマンス系言語専攻出身の川口裕司（昭和五十六年卒）が静岡大学から助教授として転任し、また二宮の後任には、本学卒業後に東京大学大学院人文科

学研究科で西洋史学を専攻した工藤光一（昭和五十八年卒）が成蹊大学から講師として転任し、ともに九五年四月に着任した。川口は、中世フランス語およびフランスにおける方言ないし地方語を専門とし、とくに方言ないし地方語に関する講義は、本学におけるフランス語教育に新風を吹き込むことになった。工藤は、「新しい歴史学」とも呼ばれた社会史の日本における展開をリードしてきた二宮から指導を受けたこともあり、二宮の後を継いでフランス社会史の授業を行っているが、二宮の講義が近世史を中心としていたのに対して、近・現代史を指向している。

フランス人教官の変遷に眼を向けると、まずカトリーヌ・ガルニエが一九九二（平成四）年九月に帰国し、同年十月フランスソワ・セルジュ・ローが後を継いだ。ローは本学で教壇に立つかたわら、小説家としての創作にも従事し、本学が登場する小説「愛」（一九九四年）などをフランスで刊行する。また九三年九月には、ヴァンサン・ギユマーが帰国し、代わって同年十月ミカエル・フェリエが着任した。フェリエはほどなく、NHKのテレビ、次いでラジオの「フランス語講座」でも活躍する。

学部改組―七課程三大講座制への移行

一九九〇年代における第二の大きな改変は、学部の改組である。二十一世紀を間近に控えて、どの大学も、新しい時代の要請に対応するべく、専門教育の重視を掲げて、一斉に全面的な改革に乗り出した。本学も、伝統としてきた語学教育とともに専門教育のさらなる充実を図ることを目的として、一九九五（平成七）年に、学部の大幅な制度改革を行った。外国語学部は従来の語科制から七課程三大講座制へと改組され、旧フランス語学科は、新制度の下では、「欧米第二課程フランス語専攻」として位置づけられることとなった。入学定員は、旧語科制と同様、各専攻語単位で定められ、「欧米第二課程フランス語専攻」に入学した学生は、フランス語を一年次に一二単位、二年次に一二単

位修得しなければならぬのも従来通りだが、さらに前期二年間に「地域基礎科目」という名称のフランス関係の基礎教養科目八単位を修得することが、三年次進級の条件となった。そして三年次進級の際に、学生は、言語・情報、総合文化、地域・国際の三コース（学生に関しては、「講座」ではなく、「コース」の名称を用いている）のいずれかを選択する。三、四年次の後期課程では、講義・演習・卒論演習を一つのセットとして、同一のディシプリンを一貫して教育することで学生の専門性を高めることに目標が置かれているが、現実には教官の持ちコマ数の関係上、講義と卒論演習のセットしか組みえない教官も少なくない。

学部改組によって、旧フランス語学科所属の教官（川口、工藤の二名は、この学部改組の年の新任だが）は、各自の専門に応じて、小野、敦賀、川口は言語・情報講座、西永、水林、松浦は総合文化講座、工藤は地域・国際講座に所属が分かれることになった。学生は課程所属、教官は講座所属というちぐはぐな状況が生じたわけだが、こうした状況は、語学教育重視か専門教育重視かという、本学の教官の間に常に潜在してきた葛藤・対立の産物といえるかもしれない。しかし、教官の所属する講座は違っても、一、二年次の専攻語などのように、実際には旧語科単位で編成・運営に当たらねばならない授業も少なからずあり、フランス語学科の教官のメンバーシップは消滅していない。

フランス語学科の下で制度化され、学部改組後も継承されているものもある。一、二年次の学年度末に行われ、フランス語学科の学生にとって、二、三年次への進級の必要条件とされてきた「総合試験」（フランス語実力試験）は、学生の自主的な勉学をうながすため、なお毎年実施され続けている。また、フランス語学科研究室の名で編集・発行されてきた研究誌「ふらんぼー」も発行され続けており、ほぼ毎年一号のペースで刊行され、一九九八年で二四号を数えるにいたっている。ただし、従来は本学大学院外国語学研究所に所属するフランス語学やフランス文学専攻の院生か、もしくはその修了者の研究発表の場とされてきたこの雑誌は、外国語学研究所と地域研究研究所の統合による

地域文化研究科博士課程の設置後、その性格の再検討が提起され、一九九六（平成八）年からは、フランス史関係の研究に従事する院生にも門戸が開かれて、より広い領域を対象とするフランス研究の雑誌へと拡充が図られた。

フランス語学科を中心核とする研究グループによる活発な研究の展開も見られる。本学科を土台とした旧「大学院外国語学研究科（ロマンス系言語専攻フランス語学）」出身のフランス語学研究者によって構成されている「東京外国語大学グループ（ヘッセイオン）」は、一九九八（平成十一）年に『フランス語を考えるーフランス語学の諸問題 II』（三修社）を刊行している。

学部改組から九八年四月現在まで、日本人教官に異動はないが、フランス人教官には交替があった。九六年三月にはミカエル・フェリエが中央大学に転じ、代わって同年四月ジャンヌ・フランソワーズ・ドッピアが着任した。九八年三月には、フランソワ・セルジュ・ローとドッピアがともに帰国し、同年四月新たにエルヴェ・クーショとフランソワ・ルーセルの両名を迎え入れたばかりである。

先に学部改組以後における旧フランス語学科からの連続性について述べたが、またその一方で、時代の変化とそれに伴う要請にに応じて、フランス語学科の内部改革も胎動し始めている。一九九〇年代に入って、各大学で制度改革が推進されるなか、大学の自己点検も盛んに行われるようになり、学生による授業評価の制度を導入する大学も現われてきた。本学では、そうした制度は公式には導入されていないが、フランス語学科では、一九九七（平成九）年、フランス語専攻の学生のみならず、外国語科目（一般語学）としてフランス語の授業を履修している学生も対象として、フランス語の授業に対する学生の意見のアンケート調査を実施した。教官個々人のレビューではともかく、学科レビューでの授業についての体系的なアンケート調査は、本学科では初めての試みであった。歯に衣着せぬ意見もあり、教官のなかには戸惑いの色を見せる者もあったが、アンケート調査はフランス語の授業のあり方を全面的に再検討す

る契機となった。とくに一、二年次の専攻語の授業については、語学力のさらなる強化と後期課程（三、四年次）の専門的な授業への架橋との双方を図る新たな授業体制への模索が始まろうとしているところである。

本学建学とともに百有余年の歩みを続けてきたフランス語学科は、各界に幾多の有能な人材を送り出してきた。その間、日本と同様、フランスも大きな変貌を遂げてきた。近年では、ヨーロッパ統合の進展や植民地支配の代償である移民問題の増大などに伴って、「国民国家」としてのフランスそのものが「再審」に付されている。本学でフランスについて学んだ者、現在学んでいる者、そしてこれから学ぼうとする者にとつて、フランスという「国民国家」を自明の前提とせずにフランスを見るという柔軟な思考がぜひ必要とされよう。また、フランス本土という「六角形」に捕われず、ベルギーのワロン語圏、カナダのケベック、ポリネシアの「海外領土」など、広くフランス語圏に眼を向けてゆく必要もあろう。こうした「六角形」を超えた講義の設定は、本学科にとつての今後の課題でもある。

ファッションの国、グルメの国、芸術の国……大方の日本人にとつて、フランスほどステレオタイプ化されたイメージに支配されている国もないのではなからうか。フランス語学科に学んだ人々は、こうしたステレオタイプを打ち破り、フランス文化の多様性や奥深さを学んだはずである。本学独立百周年を機に、そうした場としての本学科が一層の充実化へと向かい、さらに時代の変化に対応した新たな発展を遂げてゆくことが期待される。

フランス語科専任教官一覧

0、東京外国語学校「草創期」（一八七三—一八八四年）

今村有隣、大工原信吉、興津辰矩、甲斐謙之助、

玉名程三、辻謙之介、上田文蔵、山崎豊治、佐藤金三郎

- 1、東京外国語学校・東京外事専門学校時代（一八九九—一九五二年）
- 吉田義静（一八九九—一九〇四）
- 瀧村立太郎（一九〇〇—一九三九）
- 若林耿介（一九〇五）
- 重野紹一郎（一九〇七—一九一七）
- 井上源二郎（一九一九—一九二二）
- 鷺尾 猛（一九二〇—一九四七）
- 増田俊雄（一九二二—一九四二）
- 大森 劔三（一九二八—一九三二、浦和高等学校と兼任）
- 貴志忠直（一九三〇—一九三八）
- 工藤 肃（一九三八—一九四六）
- 永井 順（一九四〇—一九五二）
- 小林 正（一九四一—一九四七）
- 家島光一郎（一九四七—一九五二）
- 新里榮造（一九四七—一九五二）
- 鈴木健郎（一九四八—一九五二）

四 東京外国語大学時代

2、東京外国語大学時代（一九四九―）

永井 順（一九四九―五八）

家島光一郎（一九四九―七二）

新里榮造（一九四九―五七）

鈴木健郎（一九四九―六三）

田島 宏（一九五一―八四）

朝倉 剛（一九五八―八六）

篠田浩一郎（一九五八―九十）

岩崎 力（一九六三―九四）

二宮宏之（一九六六―九五）

渡瀬嘉朗（一九六一―九五）

小野正敦（一九六九―）

西永良成（一九七二―）

敦賀陽一郎（一九八五―）

松浦寿夫（一九八八―）

水林 章（一九九一―）

川口裕司（一九九五―）

工藤光一（一九九五―）

フランス語学科非常勤講師一覧(在職期間はすべて西暦、一九XXはXXと略記)

1、東京外国語学校・東京外事専門学校時代(一八九九—一九五一年)

神藤才一(一八九九—一九〇四)、庄司鉄造(一八九九)、鶴田久蔵(一八九九)、織田信義(〇一—〇九)、市野良雄(〇一—一〇)、中川豆介(〇四—〇七)、杉田義雄(〇六—一九、二三—二七)、武田英一(二七—二二)、久米桂一郎(二八—二〇)、内藤濯(二八)、斉藤寛(一九)、時田清(二〇—二四)、関根秀雄(二〇—三五)、毛利由一(二〇)、山内義雄(二二—二四)、戸田阿喜太(二八)、丸山順太郎(二九—三〇)、松下和則(四七—五〇)、小宮山寛(四八—四九)

2、東京外国語大学時代(一九四九—)

前嶋信次(五三—五七)、山内篤治(五五—六〇)、滝田文彦(五七—五八)、野村二郎(五七—五八、六六—七一)、縫田清二(五八—六〇)、南條彰宏(五八)、渡辺守章(五八—六五)、小林正(六一—六三)、遠藤輝明(六一—七一)、中島昭和(六〇—六四、六六—六七)、新倉俊一(六一—六五、八〇—八一、八三—八四)、佐藤真(六一—六九、七一—七二)、金沢誠(六三—六七、七〇—七二)、井上九一郎(六三—六八)、小林路易(六五—八〇)、沢孝輔(六四—六六)、吉村啓喜(六四—八五)、河村正夫(六五—六六)、窪川英水(六五—六六、六七—七〇)、霧生和夫(六五—六七)、倉田清(六五—七二)、伊東英(六五—六八、八一—八三)、加藤晴久(六六—六七)、小林英夫(六六—六八)、清水徹(六六—六七)、戸張智雄(六六—六八)、三宅徳嘉(六六—六九)、鯨井佑士(六七—七二)、松田稷(六七—七二)、安田悦子(六七—九二)、大賀正喜(六八—八五、九〇—九三)、二宮敬(六八—七〇、七二—七三)、加藤晴康(七〇—七六)、高坂和彦(七〇—九五)、武本竹生(七〇—七二)、花輪光(七〇—七一)、

丸山圭三郎(七〇一七三)、鷲田哲夫(七〇一九三)、赤井彰(七一七四)、柴田朝子(七一八〇)、遅塚忠躬(七一七二)、七八一七九)、松尾国彦(七一七六)、矢島猷三(七一九二)、小林正(七二一七三)、角山元保(七二一七七、七九一八五)、市川智子(七三一八七、八八一九〇)、権上康男(七三一七四)、竹内孝次(七三一七七)、戸張規子(七三一七六)、蓮実重彦(七三一七四)、林迪義(七三一七四)、宮治一雄(七三一七四)、長部重康(七四一七八、八〇一八七)、平岡篤頼(七四一七六)、沼田睦子(七五一七六)、市川慎一(七六一七八、八一一九〇)、木下賢一(七六一八〇)、加藤栄一(七七一七八)、島岡茂(七七一八〇)、鈴木等(七七一七九、八二一八三、八七一)、竹内典子(七七一八〇、八七一九二)、中川努(七七一八二)、羽賀賢二(七七一七八)、鳥居正文(七八一九一、九二一)、松村文雄(七八一七九)、高田晴夫(七九一八二)、井村順一(八〇一八三)、北山研二(八〇一八二)、福井憲彦(八〇一九三)、宮島喬(八〇一)、芳川ゆかり(八一一九二)、南館英孝(八三一八七、八八一八九、九〇一)、六鹿豊(八三一八五)、月村辰雄(八五一九〇)、中島弘二(八五一九六)、三浦信孝(八五一八七、八八一八九)、森田秀二(八五一八八)、山田博志(八五一九四、九七一九八)、谷川多佳子(八六一九〇)、岩田好司(八七一八八、九五一九六)、大久保康明(八七一九〇)、木村恵一(八七一九二)、林田伸一(八七一八九)、岩間直美(八八一八九)、宇田川和夫(八八一八九、九八一)、佐原隆雄(八八一八九)、伊藤るり(八九一九二)、原聖(八九一九三)、浅野幸生(九〇一九五)、石川知広(九〇一)、筒井由美子(九〇一九二)、松村剛(九〇一九四)、磯野暢佑(九一一九二)、菅波和子(九一一)、山本伸一(九一一九八)、甲斐基文(九二一九五)、西野清二(九二一九三)、井口早苗(九三一九六)、井上スズ(九三一九五)、岡田真知夫(九三一九五)、尾形こづえ(九四一九七、九八一)、朝倉文博(九五一一)、高澤紀恵(九五一九八)、中川洋一郎(九五一九七)、中本武志(九五一九八)、和田光昌(九六一九七)、佐々木真(九七一九八)、鈴木正道(九七一)、矢後和彦(九七一九八)、澤田直之(九八一)

お雇いフランス人教師

- ピエール・ジョゼフ・ムリエ Pierre Joseph Mourrier (一八七四—七五)
 ピジョン Pigeon (一八七五—七七)
 レオン・ブラン Léon Brin (一八七二—七六)
 フロック・プロスペル・フロイデントアレール Flock Prosper Freudenthaler (一八七三)
 イポリット・エスナール Hippolyte Esnard (一八七六—八二)
 ジャン・バティスト・アルテュール・アリヴェ Jean Baptiste Arthur Arrivet (一八七八—八二)
 ファーブル・アントワヌ Fabre Antoine (一八七七一—八〇)
 プロスペル・フォルテユネ・フーン Prosper Fortuné Fouque (一八七九—八五)
 ポール・エドガール・プラ Paul Edgard Plat (一八七四—七六)
 エドガール・ルボ・モントゥール Edgard Rebot Montour (一八七五—七七)
 レオン・デュリ Léon Dury (一八七六—七七)

外国人教師

- エマニエル・トロンロワ Emmanuel Tronquois (一九〇〇)
 ポール・ジャクレー Paul Jacoulet (一八九七—一九一五、一九一九—二二)
 エリ・オブワン Elie Aubouin (一一—一二四)
 モイーズ・シャルル・アグノエール Moïse Charles Haguenauer (一二四—三〇)

四 東京外国語大学時代

- アルベール・フリゾン Albert Frison (二七一三〇)
フレデリック・ヌエット Frédéric (Noël) Nouet (二〇一四七)
ジャック・カンドウ Jacques Candau (五九一六二)
ジャン＝ジャック・オリガス Jean-Jacques Origas (六二一六四)
ユベール・マエス Hubert Maes (六四一六六)
クロード・ジエルトフェール Claude Gerthoffert (六五一六八)
クリスチャン・モリュー Christian Morieux (六八七七一)
ジャン＝リュック・ドムナツン Jean-Luc Domenach (七〇一七一)
アラン・ヴァルテール Alain Walter (七一七四)
ミッシェル・ヴァッセルマン Michel Wasserman (七四一七六)
エリック・セズレー Eric Seizelet (七六一七八)
ジャン＝マリ・グレミヤール Jean-Marie Gremillard (七八一八〇)
エストレリータ・ヴァッセルマン Estrellita Wasserman (七八一七九)
アニエス・ディッソン Agnès Disson (七九一八二)
フィリップ・ギヨン Philippe Guillon (八〇一八二)
ディディエ・シッシュ Didier Chiche (八二一八五)
ダニエル・ストリュエヴ Daniel Struve (八二一八四)
ジャン＝マルク・サラル Jean-Marc Sarale (八四一八七)

- オリヴィエ・ジャメ Olivier Janet (八五—八六)
 アルノ・ルジュ・ド・ブーヴ Arnaud Roujou De Boubée (八六—九〇)
 ピエール・スイリ Pierre Souyri (八七—八九)
 ヴアンサン・ギユマール Vincent Guillemard (八九—九三)
 カトリーヌ・ガルニエ Catherine Garnier (九〇—九二)
 フランソワ・セルジュ・ロー François Serge Laut (九二—九八)
 ミカエル・フェリエ Michael Ferrer (九三—九六)
 ジャンヌ・フランソワーズ・デュジャト Jeanne Françoise Doppia (九六—九八)
 エルヴェ・クーシヨ Hervé Couchot (九八—)
 フランソワ・ルーセル François Roussel (九八—)

外国人講師(外国人教師に就いた者は省いてある)

- ジョゼフ・コット Joseph Cotte (〇九—一四)
 オクターブ・ルトウルヌール Octave Letourneur (一五—一七)
 アンリ・ブシエ Henri Boucher (一五—一九)
 モリス・アルフレッド・ブルユニエ Maurice Alfred Prunier (二〇)
 イラ・カトリーヌ・メタクサ Ira Cathrine Metaxa (二二)
 アルベール・メボン Albert Maybon (二二—二四)

四 東京外国語大学時代

- フランソワ・グゼネック Francois Guezennec (二二―二四)
マルセル・ロベール Marcel Robert (二四)
マリ・ボネ Marie Bonnet (二四' 二九―四四)
マリ・日疋 (レタシエ) (四七―四九)
アレクシ・ウツサン Alexis Houssin (五〇―五二)
ジャン・ルネ・ルナル Jean René Renard (五二―五八)
ジョルジュ・イポリット・シヨゼン・ボンマルジャン Georges Hippolyte Joseph Bonmarchand (五三―五八)
ポール・リーチ Paul Rietsch (五六―五七)
ミシェル・ソフシエ Michel Soymié (五八―五九)
ニコル・ソフシエ Nicole Soymié (五八―五九)
アンドレ・ダルダニヌ André Dardennes (六〇―六一)
ミシェル・ヴィエ Michel Vié (六五)
アンドレ・フラジュエ André Frappier (六五)
アニー・木内 (ノットー) (六六―六七)
ジョルジュ・ジェラルド Georges Gérard (六七―七〇)
ジュヌヴィエーヴ・ドムナツン Geneviève Domenach (七〇―七二)
フランソワーズ・ブーリス Françoise Bourhis (七二―七三)
フランソワーズ・ヴィル Françoise Will (七三)

- コレット・アンペラトリス Colette Impératrice (七三—七七)
 ノエル・ラサル Noëlle Lassalle (七三)
 マリ・フランス・デルキノン Marie France Delmont (七四—八五)
 ティエリ・トルード Thierry Troude (七九)
 エリカ・ペシャル Erika Peschard (七九—八一)
 ベルナール・パルミエ Bernard Palmier (八〇)
 クリステイヌ・ギヨン Christine Guillon (八一)
 クロード・ロベルジュ Claude Roberge (八三)
 ジャン＝マリ・ブイヌー Jean-Marie Bouissou (八三)
 ジェラール・マルセル・スイアリ Gérard Marcel Siary (八五—八九)
 フランス・エリザ・ドルヌ France Elisa Dhome (八五—九〇)
 ジャン＝ルイ・デュボアン Jean-Louis Dupont (八六—九三)
 ドミニク・ペシャル Dominique Paul Vincent Peschard (九一—九七)
 ファビエヌ・ギユマン Fabienne Guillemain (九二—九三)
 ジャクリヌ・アリアヌ・シナ・コエン Jacqueline Arienne Mina Cohen (九三—)
 アヌ・ロール・デストロキエ Anne Laure Destremau (九三—九四)
 ダヴィッド・ブラウシ David Braun (九四—九五)
 ジャン・ガブリエル・デュボアン Jean Gabriel Dupuy (九四)

デイディエ・フェルナン・ロックス Didier Fernand Rox (九五―九七)
カトリヌ・ボレンシュタイン Catherine Borenstein (九六―)
ルイズ・フォンテーヌ Louise Fontaine (九八―)
リリアヌ・ラタンズイオ Liliane Lattanzio (九八―)